

## キリシタン遺跡巡礼の旅—中山道を歩く—

戦国時代ポルトガルからやってきて九州に上陸した宣教師達の中には中山道や奥羽街道を歩いて仙台や東北地方にまで足を延ばして布教活動を行った。現代の我々には到底真似の出来ない活動的な長旅である。中山道に宿場が整備されはじめたのは1601年からで、京都から江戸まで534km、東海道より長くかつ険しい山越えの道が多い。したがって戦国時代彼らの旅は野宿かさもなくば寺や庄屋などに頼んで泊まるしかなかったと考えられる。当時外人など見たこともない地方の人達にとっては彼らを泊めるには相当勇気がいったに違いない。それで彼らは日本人伝道師を通訳代わりに伴いかつキリシタン大名や土地の有力者から通行手形をもらって旅をしたと思われる。中山道沿いの庄屋に宣教師一行を泊めた記録が一部残されている。また戦国時代は真田昌幸の上田城下などにキリシタンがかなり居たことが知られており、真田家もキリシタン大名との交流でキリシタンに対して好意的だったのだろう。一説には昌幸らもキリシタンだったとの話もあるらしい。徳川の時代になって本陣を備えた宿場が整備されてからは幕府の禁教令によりキリシタン関連の記録は抹殺されたため中山道周辺にキリシタンの遺跡はほとんど残っていないと言う。逆にキリシタンを見つけた者は奉行所に通報すべしという高札が各宿場に掲げられた。しかし阿部明朗氏が全国かくれキリシタン研究会報に投稿された「中山道・木曾路・美濃路のキリシタン史跡」なる論文を見ると中山道沿いの村々にもキリシタン墓碑などがちょこちょこあるようである。それを参考に中山道を少し歩いてみたい気になったが、今の私にはてくてく歩いて遺跡を探すだけの体力がないため断念せざるを得ない。そこで中山道の遺跡巡礼はあきらめてJRの駅に近い宿場を少し歩くことにした。また久しぶりに高崎から信越本線と小海線に乗ってみたいとなった。なお信越本線といっても新幹線ができてからは今や高崎と横川のたったの29kmしかない。これも近々廃線になるかものうわさもある。横川と軽井沢の間はバス連絡になり、信越本線の看板だったかつてのアプト式がなくなり、そして軽井沢から長野まで民営化された。これも時代の流れと言ってしまうとそれまでだが承服しかねる人も多くいるだろう。また今回私が小海線に乗ることにした理由の一つに以前から気になっていた臼田にある五稜郭をぜひ見たかったからである。五稜郭といえば函館だが日本にはもう一つここ信州佐久にもあることは案外知らていない。私も初めての訪問である。

11月13日(日)早朝新幹線で浜松へ、午前中教会に出席した後新幹線で小田原へ、そこから快速高崎行きに乗り換えた。実はその日は高崎から少し先の磯部温泉で宿泊したかったが駅近くの宿の二軒に電話したが満員で断られ、仕方なく高崎駅前の東横インで泊ることにした。ここは以前泊まったことがあり、翌朝7:30の横川行きに乗るには便利である。高崎を出てすぐ左窓にあの独特の姿をした妙義山

が見えてくる。横川まで30分、横川と言えば駅弁の「峠の釜めし」が名物であるが弁当は売っていなかった。接続のバスに乗り替えて軽井沢へ。駅は新幹線が停車するようになって立派にリフォームされ、駅の展望台から浅間山がよく見える。しなの鉄道の小諸まで切符を買いふと横をみると横川の釜めしを売っている。昼用にと買ったがずっしり重い陶器製の釜形弁当は昔と同じだった。駅弁をぶら下げて小諸へ。そこからJRの小海線に乗り替え佐久の岩村田で下車した。



**岩村田の宿場** 中山道は群馬側から信州に入るとまず18番の軽井沢宿を経て19番沓掛、20番追分、21番小田井から22番佐久の岩村田に着く。岩村田は室町時代から民家六千軒を数える交易盛んな信濃有数の町として繁栄した。しかし室町末期地方豪族による争いが絶えず戦火で廃墟と化し、やがて甲斐の武田の支配下に入り戦国期にかけて次第に復興し、江戸期には主要な宿場町となった。かつての宿場町はJRの駅から歩いて十分程にある。しかし今は見渡しても宿場の面影は全くない。岩村田の本陣や脇本陣は一度火災にあってその後再建されぬまま明治を迎えた。本陣は無くなったが旧本陣の篠澤家は健在で、最近その篠澤家保存の古文書の中から宣教師らが宿泊した記録が見つかった(平成24年の「かくれキリシタン研究会」の全国大会が佐久ホテルで開催された折に同研究会副会長宮地國男氏および同ホテル社長篠澤氏からその事情が紹介された模様)。篠澤家は戦国時代武田信玄とも親交がある旧家である。戦国時代から幕府の禁教令(1614年)まで京と江戸、上野、仙台あたりまでかなりの外国人宣教師や日本人伝道師がこの中山道を往来していたようである。ちなみに皇女和宮一行は岩村田に本陣がなかったため泊らず通過している。

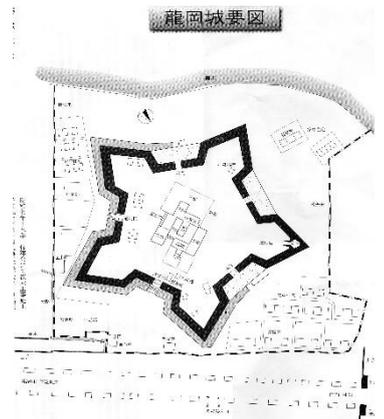
駅から北東十数分中山道沿いに竜雲寺という古刹がある。昭和6年この寺で信玄の遺骨(推定)が見つかった。今そこに五輪塔が建っている(右写真)。信玄のころはこのあたりは甲斐武田の領地で信玄はこの寺に深く帰依ししばしば訪れていた。伊那駒場で病死した信玄の遺体が密かにこの寺に葬られたとの記録から信玄の遺骨と見られ、現在遺骨は本堂の奥の霊廟に納骨されている。五輪塔の前に若い男性がいたので声をかけたら史跡巡りが趣味で信州を中心に古道や史跡をよく見て歩いていると言う。私はこれから臼田の五稜郭に行くといったら「じゃそこまで車で送らしましょう。私の家から近いですから」という。列車本数の少ない小海線のこと、車で五稜郭に直行できるなんて願ってもない話。車で20数分ほど五稜郭入口の受付案内所の前で降ろしていただいた。受付と言っても入場料がいるわけでもなく、ちょっとした資料館と土産物、トイレなどを備えているだけで二人の女性ボランティアが訪問客にサービスしている。昼もすぎたのでそこで横川の釜めしを食べることにした。すると女性がお茶と沢庵を持ってきてくれた。彼女曰く「私が漬けたんよ、どうぞ。長野県はね沖縄に次いで長



寿県なのよ、県をあげて減塩運動を実施したお蔭」と言われてご馳走になった。おいしかったけれどかなりしょっぱかったな!? 2時に新潟の長岡から観光バスが来てボランティアガイドが解説してくれるというので、それまで小一時間五稜郭の回りを見て回ることにした。

### 竜岡五稜郭

幕末にこの五稜郭を建てたのはこの地方の領主だった松平乗謨である。徳川の親族で1万2千石の大名であるが城持ち大名ではなかった。彼は非常な勉強家で洋学にも通じていて押し寄せる外国の列強への備えの必要性を感じていた彼はここに城塞の建設を考えた。しかし徳川の治世下では城を新たに作るなど許される訳はなく、そこで一計を案じたかどうかわからないが平野に日本式でなく星型の洋式の城と屋敷をつくることを思いついた。これなら城には非ずご法度に触れまいと考えて1862年幕府に願い出て許可を受けた。モデルにしたのは17世紀フランスのヴォーバン城である。★の先端に回転台付大砲を5台もすえれば360



現在の大手門の石垣と堀

度攻撃可能かつ敵の動きもよくわかる。彼はフランス語も勉強し堪能だったのでこのような星形の洋式城の利点をよく知っていたらしい。自ら設計し2年かけて完成、石垣の積み方にも洋式が取り入れられている。ところが間もなく時代は明治に移り、新政府の廃藩置県政策によって大名のいる城の取り壊しが始まった。佐久松平家(そのころは名を松平から大給に変更していた)のこの城屋敷も取り壊しの対象となり、屋敷の一部が売り払らわれ移築されたが、その跡を小学校として有効利用することで堀と石垣はそのまま残された。戦後鉄筋の現校舎に建て替わり、クランドや遊園地として開放されている。なお松平時代の屋敷のうち台所と呼ばれる大きな木造の建物一棟だけが今もそのまま保存されていてガイドが内部を案内してくれる。五稜郭は現在国の史跡に指定されているが、史跡内に学校はよろしくないのでは移転するよう文化庁から通告されているとのことである。かつては小学校用地にすることで城塞としての姿は保存されたのに、今は五稜郭公園にすべく逆に小学校追い出しを命じられているのは皮肉である。しかし城内に学校や公的建物が建っている城郭史跡は沢山あるというのに文化庁の意図が良くわからないとその小学校出身のボランティア氏の言であった。なおこの学校は日本一海から遠いそうだ。私は石垣の土塁に上って石垣に沿って一周してみたが確かに★型であることは歴然で、しかし一部石垣がつぶれていたり堀が埋められて住宅と接していたりで手入れが行き届いていない。その点では整備の行き届いた函館の五稜郭に比すべくもないが世界的にも稀な貴重な城塞史跡であることには変わりなく一見の価値はある。佐久にはこのほか見るべき神社仏閣も多いが時間に余裕なく、タクシーを呼んでもらって再び小海線に乗り小淵沢に向かった。八ヶ岳山麓を走る小海線にはJRで日本一高所の駅がある。車窓か

らのどかな高原風景を見ていたらいつの間にか眠ってしまい小淵沢という駅の案内放送ではっと目が覚めた。終点でなければ寝過ぎすところだった。中央線松本行きに乗り替え、下諏訪で下車するころはとっぷり日が暮れしかも雨が降っていた。予約していた宿へは歩けない距離ではないが雨の中探し歩くのも厄介なのでタクシーに乗った。狭い路地にある古い旅館でかつては花街としてにぎわった町である。この旅館も昔は芸者の置屋だったとのことである。



### 下諏訪宿

下諏訪の宿場は中山道の中でもっとも重要な宿場の一つであった。京と江戸のほぼ中間にあり、しかも険しい和田峠を乗り越えあるいは前にして温泉で体を休める絶好の宿場であった。もちろん和宮もここの本陣に泊まっている。千人とも二千人とも言われる行列を伴った和宮ら一行は京から江戸まで 25 日で踏破しているから一日あたり 22km 歩いたことになる。どの宿場も全員を泊める余裕はなく、しかも大量の嫁入り道具に風呂桶からトイレまで持参している。そこで幕府は各宿場にお伴の宿泊用に沢山仮小屋を設置したという。そのため全国から大工や資材を集めた。かつ宿場近隣の人を総動員して食事の準備・接待、まったく有難迷惑な話である。一日中輿に乗る和宮も大変である。現代人ならとっくにエコノミ症候群になるのが落ちだろう。下諏訪の本陣には今も和宮が宿泊した部屋が保存されている。私は何度も下諏訪の町を通過 **本陣跡の旅館と和宮の部屋**



しているのに本陣に寄った記憶がない。というのも本陣は私有になっていて高級旅館として営業している。そこで私は宿の女将にどうすれば和宮の部屋が見られるか聞いてみたところ、女将はフロントで聞いたら見せてもらえるはずという。そこで 9 時半ころ本陣に出向いて旅館の前で客を見送っていた女中さんに要件を話したが、今はチェックアウトの時間でフロントは忙しいし、他の職員も部屋や食事の片付けで手いっぱいだから駄目と断られた。そこで引き下がるのも残念と思い、和宮の歩いた道を尋ねて遠く京都から来たんどすけど残念やなといって帰ろうとしたら、じゃちょっと待って女将に聞いてくるからと中に入ってしまった。しばらくして出てきてこっちへお出という。靴のままでよいからと奥の二間続きの和室の前まで案内してくれた。そこで靴脱いで一人で見て頂戴という。最初の 8 畳くらいの部屋に和宮が着用していたという着物が飾ってあり、隣の一段高い書院風の十畳くらいの部屋に座布団に脇息、その前にお膳が据えられ、和宮にお出ししたお膳との説明書きがあった。そこは入室禁止となっていてどんな料理がお膳に乗っていたのか不明だが皿の数からみて質素だった。姫君も疲れ果ててほんの箸をつける程度で量より質の高い料理になったのだろうか、あるいは前膳で本膳ではなかったのかも。部屋の前の廊下越しに立派な庭の一部がよく見える。残念なこ

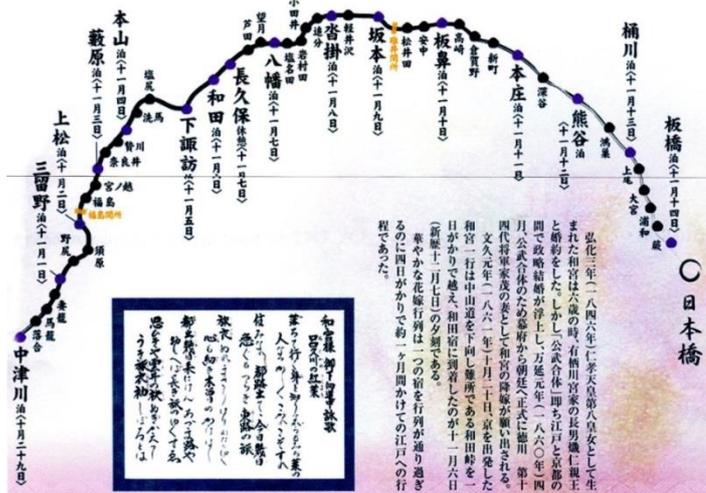
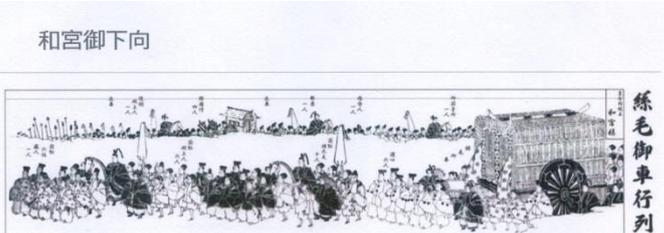
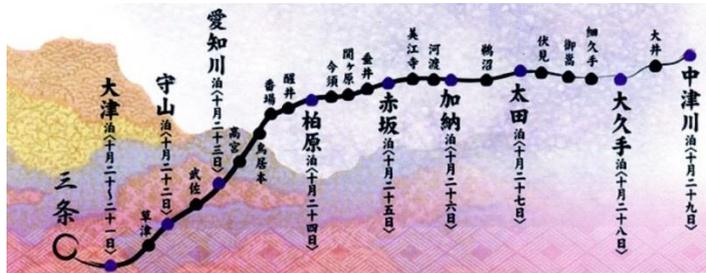
とにカメラの電池が無くなり携帯電話のカメラで撮影していたためきれいに映らない。そこを出て近くの諏訪大社に寄って御柱を見てから中山道を歩きながら駅に向かった。松本行き各停に乗り、塩尻で名古屋行きの特急に乗り換えて中津川で途中下車した。



**中津川宿** 中津川宿にキリタン禁制の高札が立っているとのことで中津川駅から十数分ぶらぶら歩いて高札場を見に行った。駅の観光案内所で地図をもらっていたのですが、昔からそこにあったかどうか聞き漏らした。今ある高札場は再現されたもので当時のものではない。見上げるように数枚の高札が掲げられており、目の良い人はともかく近眼者にはどれがキリタン関連のものかわからない。昔は御上からの通達はこんな手段しかなかったのだろうが、当時字の読める人は多くなかったから大名行列やら和宮の行列などのときは前触れが大声で粗相なきよう触れ歩いたのであろう。私が高札場で休息していたら地図を片手に 7~8 人の若いバックパックの外人さんが高札も見ずに通り過ぎて行った。中山道をトレッキングしているのだろうか。そこから約 1km の本陣跡まで中山道を歩きながら昔の面影を探したがやはりない。本陣も建物はなく駐車場になっていた。その前にある資料館に入り、しばらく学芸員と面談しキリタンの類族帳や関連資料などが無いかと質問したがそんな資料はここにはまったく無いし聞いたことも無いと素っ気ない返事だった。時間もないので今回はこれでお仕舞にして名古屋にもどった。木曾路や御嵩町の方にはキリタン遺跡がいくつかあるのでいつか足を延ばして歩いてみたいとおもっている。右の写真は竜岡城のパンフのコピー



一ですが見損ない残念でした。ただしキリタン関連の高札があったかどうか不明です。



上の図は和宮下向の行列を描いたもので、下向は今の暦では 12 月、標高 1600m の和田峠越えは積雪の中の極めて厳しい旅であったろう。公武合体のためとはいえ深窓の姫たちにとっては怨んでも怨み切れなかったであろう。中山道 69 宿のうち 23 の宿場に泊まった。東海道は川が多いし桑名から船という手もあるが

○日本橋

危険との理由で中山道になったようだ。しかし華やかな嫁入り行列の裏には庶民の血と汗による犠牲があることを忘れてはならない。